

序——説話研究の三次元化にむけて

本書は、東アジア社会に長い間大きな影響力を及ぼしてきた「孝」という考え方を、歴史上の孝行を行った人物（孝子）のエピソードを語るることによって説いた、いわゆる「孝子説話」をめぐる諸現象について、「表象」という枠組みによって捉え直してみようとする試みである。

東アジアの諸地域において、社会を支える家族間、とりわけ親子関係を規定する重要な要素として「孝」が長らく機能してきたことについては、異論の余地がないだろう。本書は、その「孝」という思想を、もつとも平明に、かつまとまった形で示した説話集「二十四孝」、およびその前身ともいえる「孝子伝」を中心的な研究対象として、それらに収められた「孝子説話」の表象が歴史的に帯びてきた諸機能・要素について明らかにしようとするものである。その流通範囲は、中国大陸は勿論、朝鮮半島、日本列島、沖縄、台湾、香港、モンゴル、ベトナム、シンガポールといった広い地域に亘っていることがわかっているが、本書では、中国と日本（及び一部韓国）の前近代までの

展開を対象としている。

ここで、本書において用いる「表象」あるいは「説話表象」という語について説明しておきたい。本書では、説話に関するテキスト、イメージ、音声、身振り、儀礼といった諸現象、さらにこれら具体化されるものを超えながら結びつけていく諸力を考察の対象としている。すなわち、説話をめぐる諸現象を、個々に存在しているものとしてではなく、相互に関係しあうものとして捉え、それらが交叉する空間の生成と構造をも考察の対象とすることを意味している。したがって、本書で扱う対象は、おのずと孝子説話のみならず、説話を取り巻く場のコンテキストにまで及ぶことになる。これを孝の表象と呼ぶこともできよう。すなわち本書では、孝とは何か、を直接問うのではなく、孝をめぐる表象およびその機能を明らかにすることを目的としている。第一章では、孝子説話が刻まれた漢墓の死者儀礼の空間の中央に陣取る樹木のイメージから分析を始めているが、これも孝子説話が機能した磁場そのものを明らかにする必要性を考えてのことであった。

近年、孝子伝及び二十四孝に対する関心は俄かに高まりをみせている。その背景には、孝子説話に関する考古学、文学、美術など多方面からの資料の発掘・紹介が相次ぎ、それに伴い各分野での研究が進むなかで、改めてその歴史的な影響力の大きさと深さ、及び文化的な厚みや豊かさに、それぞれの分野の研究者が驚嘆し、そこに目を向けたことがあったのではないだろうか。事実、二十四孝に選ばれた孝子の画像のいくつかは、仏教や道教に関する人物故事図よりも早く東アジアの絵画史上に登場し、その後二千年近く命脈を保ち続けた画題として、その歴史的厚みと文化的広がり

を誇っているのである。

ここ数十年にわたって陸続と発掘報告がなされる中国の墳墓の孝子画像、或いは日中にまたがって紹介が相次ぐ唱導資料などのテキストに見られる説話の語りの痕跡、或いは出版物の膨大さや多様さを目の当たりにするにつけ、これら孝子説話群がいかにかつての社会において意味をもって存在していたか、逆にいえば、ある意味当たり前にあつたものであつたかが、鮮やかに見て取れる。それと同時に、現在ほとんど忘却されているのは何故なのか、という問いも首をもたげているのである。

一方で、孝子説話に関する資料は、ありふれていたがために、保存状態が悪く、また散逸を免れなかつた面もある。中国の墳墓における孝子画像の発掘報告が盛んになされているが、とりわけ宋元金墓の孝子図の保存状態は総じてよいとはいえず、またそれほど身分が高い家のものではないものも多く含まれることが窺える。版本に関しても、散逸して今となつてはどのような挿図を持つていたのかわからないものがある。第七章では、そうした日本に渡来したことはわかっているものの伝存しない版本の挿図について、中国や朝鮮から渡来した他の版本の挿図との共通性が見られる遼宋以降の墓の二十四孝図をもつて補うことを試みた。また、このように渡来版本がもたらした挿図の全体像を想定できるようになったことで、江戸期に流布した標準的な二十四孝図の原型が、その前段階となる室町期の屏風等の大画面制作の現場でいかに生成されていったかについても、ある程度まで明らかにすることが可能になつたと考えている(第八章)。

なお、本書の末尾には「基礎資料編」として、これらの分析において用いた画像資料のうち二十四孝（嵯峨本及び渋川版）の孝子に関する画像を、日本の近世初期の二十四孝図の標準といえる版本挿絵二種（Ⅰ）、渡来版本の挿図（Ⅱ）、漢から宋元金墓の孝子図（Ⅲ）、室町から江戸初期にかけての屏風等大画面制作およびお伽草子類（Ⅳ）に分類して、二十四の説話毎に配列し掲載してある。遼宋元墓の画像は先述のごとく往々にして状態がよくないのであるが、図の型を把握する上で大きな意義を有するものであるため、不鮮明な図をも敢えて収録することにした。孝子図像の変遷過程を概観できるようにもなっているので、今後の画像研究の進展に役立つことになれば、望外の喜びである。

また、孝子説話は、その影響の及んだ地域、時代、メディア、享受層が多岐に亘っているために、これまで各分野での研究成果が蓄積されてきた一方で、十分にそれらが連携されているとは言い難い状況があることも否めない。資料の散逸とともに、この点もその全貌をわかり難くしている一因であろう。本書において、従来の枠組みとは別の「表象」というメディアや研究ジャンルを横断的・学際的に捉える言葉を用いているのも、各分野の研究と研究をつなげ、その隙間に光をあてたいという意図によるものであった。また、この意図は、本書の構成にも反映されている。本書は、①画像の力（墓を中心に）、②語りの生起する場、③出版メディアの空間の三部立てだが、それぞれ考古学、文学、美術、思想といった分野で個別に扱われてきた資料を、でき得る限り等価的に扱うための構成となっている。さらに結論では、これら三つの方向から一度に光をあてることによつて

孝子説話という現象の全貌を浮かび上がらせようと試みた。

以上の方法論を、本書では「説話表象文化論」と称したいと思う。この方法論の目指すところは、端的に言えば、説話研究の三次元化である。説話研究の土台となるのは、現状ではテキストや絵画を中心とした所謂二次元的資料であるが、そこから実際に説話が体験された空間を起ち上げることが目指されるべきと考えている。立体化されたその空間では、説話表象は有機的な関係性をもってそこに存在し、相互的な影響関係と動態の様相をもっていたはずである。すなわち、説話をめぐる諸資料やそれに関する研究を三次元的な局面を想定することにより、次元をステップアップさせて総合化することが本研究の目的といえるだろう。

本書は、まだその展望のほとりに立つたばかりに過ぎない。しかし本書を通して、「表象」という枠組みから孝子説話をめぐる諸現象を眺めてきたなかで、これまで単に教訓として捉えられてきたものが、どうも違う見え方をしてくることがおぼろげながらも見えてきた。それは、人びとの日々の生活の中の希望や幸福、または恐れや不安といったきわめて個人的な内的動機に直接結びつく性質のものであり、父母から拡張して共同体を支える原理となった側面に注目されがちな孝であるが、東アジア社会に広く浸透し定着していった背景には、別の要因も大きく働いていたことが明らかにようになってきたのである。それは、言うなれば、父母を根源と見、そこに溯るといふ志向性に基づいたより個人的な側面や、それによつてむしろ共同体から脱するような方向性の萌芽であったと考えている。

本書は、私自身がいくつかわりの変化を遂げていった過程がそのまま露呈されたものとなっている。全てのトーンをそろえることを敢えてしなかったのは、おそらくこのような形の書物は一生のうちにはそう生まれるものではないと自覚しているところによる。したがって、甚だ読みにくいものとなってしまうことをご容赦いただきたい。一人の若輩者の迷い込んだ学問世界の逡巡の跡と受けとめていただければ幸いである。

平成二十八年一月十三日

宇野瑞木

目次

口絵

伝雛屋立圃筆二十四孝奈良絵本／二十四孝手鑑

序——説話研究の三次元化にむけて……………(1)

序論……………1

第一節 魯迅の個人的体験としての『二十四孝図』……………1

第二節 二十四孝とは……………2

第三節 二十四孝研究の現在……………5

第四節 研究の目的と方法——説話表象文化論的アプローチ……………8

第五節 全体の構成……………10

第六節 近代と前近代の連続／不連続の狭間で……………12

第一部 図像の力

はじめに——墓と図像……………

注……………

第一章 後漢墓における孝の表象——山東省嘉祥県武梁祠画像石を中心に……………

第一節 祠堂の登場——孝の表象としての墓……………

第二節 武梁祠画像石の樹木のモチーフ……………

第三節 扶搖と扶桑——風と木の互換可能性……………

第四節 静から動へ——徳の物理的な働きを引き出す「射」……………

第五節 歴史故事図の意味——後漢墓における孝子図の機能……………

第六節 実際の墓域と画像石の世界との関係——墓域の木から……………

小 結……………

注……………

注……………

14

第二章 六朝時代以降の孝子図——墓における複数の世界観と孝との融合……………

第一節 六朝時代の石棺における孝子図の発掘状況と先行研究……………

第二節 六朝時代の孝子図の特徴——漢墓の孝子図との共通点と相違点……………

第三節 樹木と雲気のモチーフの行方……………

第四節 孝子図に入り込んだ樹木モチーフ——唐墓の樹下人図としての孝子図……………

小 結……………

注……………

第三章 孝子伝図から二十四孝図へ——遼・宋代以降を中心に……………

第一節 二十四孝図の登場……………

第二節 伝統的孝子図の変遷……………

第三節 墓の図像から版本の挿図へ……………

第四節 二十四孝の三系統の採択説話とその特徴——孝子伝との比較から……………

第五節 孝子と親のあるべき姿——二十四孝図に描かれるもの、描かれないもの……………

小 結……………

167

注	168
結	197
第一節 孝子図の変遷とその社会的・宗教的背景	197
第二節 二十四孝図の登場とその社会的宗教的背景	211
注	231

第二部 語りの生起する場

はじめに——今、ここを現出する力	243
注	249

第四章 郭巨説話の母子像——唐代仏教寺院における唱導を中心に

はじめに——郭巨説話の可変的要素	251
第一節 郭巨説話の変容——妻の子に対する愛情に関する描写	252
第二節 説話の変容の要因・背景について	257

第三節 唐代寺院の唱導と『二十四孝押座文』	260
第四節 『父母恩重経』諸本とその周辺の文脈——母の恩愛と子の年齢「三歳」をめぐって	263
第五節 郭巨図の母子像	269
第六節 二十四孝の成立と「十種恩徳」	271
第七節 郭巨説話と儒仏の〈孝〉	275
小 結	280
注	280

第五章 郭巨説話の「母の悲しみ」——日本中世前期の安居院流唱導を中心に

はじめに——郭巨説話における「母の悲しみ」	289
第一節 日本中世における郭巨説話の流布状況および先行研究	298
第二節 安居院流唱導における中国孝子説話の活用	302
第三節 『心地観経』における「悲母」の恩と郭巨説話の「母の悲しみ」	311
第四節 澄憲とその時代——「母性」優位の言説	321
第五節 安居院流と女性にまつわる禁忌 ^{タブー}	327

小結	333
注	336
第六章 日本中世の追善供養の場と孝子説話——『金玉要集』の孟宗説話を中心に	347
はじめに	347
第一節 『金玉要集』の孟宗説話の特異性と唱導性	349
第二節 『金玉要集』の孟宗説話の典拠	354
第三節 『金玉要集』の孟宗説話に呼び込まれた女性の驕慢および無常の文脈	359
第四節 母の墮地獄と孝子の救済——孟宗説話と目連救母説話の近接	365
第五節 和歌・漢詩・絵画の交差する場における孝子説話の消化	372
小結	375
注	376
結	383
第一節 中国孝子説話の位置づけとその機能——日本中古中世を中心に	385
第二節 画像不在の背景——宗教的背景の考察を通して	412
注	426
第三部 出版メディアの空間	
はじめに——視覚時代の幕開け	445
注	448
第七章 和製二十四孝図の誕生——日中韓の画像比較から	451
はじめに	451
第一節 渋川版『御伽文庫』シリーズの「二十四孝」の挿絵	453
第二節 先行する二十四孝図	455
第三節 渋川版の画像における渡来テキストの摂取の仕方	470
第四節 日本で生じた孝子図の変容	476
小結	480
注	481

第八章 蓑笠姿の孟宗——日本における二十四孝の絵画化と五山僧

はじめに——日本における孟宗図変容の二側面……

第一節 孟宗図を作り変えたのは誰か？——文人姿から蓑笠姿の孟宗へ……

第二節 五山文学における「蓑」「笠」の詩意……

第三節 五山僧における孟宗観——清廉な精神性、望郷の念および楽園の表象……

第四節 二十四孝図と他の漢画におけるモチーフの共有——山水に棲む孝子たち……

第五節 「竹に泣く」孟宗図の意味——絵画化される時間性の差異……

小 結……

注……

第九章 江戸期における二十四孝イメージの氾濫／反乱——不孝、遊戯を契機として……

はじめに……

第一節 二十四孝関係の出版物のヴァリエーション——西鶴の登場まで……

第二節 逆転・解体・乱反射する二十四孝イメージ——西鶴『本朝二十不孝』の場合……

第三節 二十四孝のコスプレ？——黄表紙『二十四孝安売請合』の場合……

注……

結

第一節 視覚的時代の幕開け……

第二節 孝子像の複数性と二十四孝……

第三節 二十四孝の位置づけ……

第四節 二十四孝の機能……

小 結——二十四孝の賞味期限……

注……

結論 孝の表象——波うち際にて……

第一節 孝の表象と樹木表象あるいは「母」の場所……

614	第一節 孝の表象と樹木表象あるいは「母」の場所……
613	結論 孝の表象——波うち際にて……
602	注……
599	小 結——二十四孝の賞味期限……
582	第四節 二十四孝の機能……
571	第三節 二十四孝の位置づけ……
558	第二節 孝子像の複数性と二十四孝……
553	第一節 視覚的時代の幕開け……
553	結……
546	注……
546	小 結 日本近世における二十四孝の受け止められ方……
542	第五節 二十四孝イメージの行方——記号の氾濫／反乱、偏在へ……
540	第四節 孝の世俗化と不孝という契機……
535	第三節 二十四孝のコスプレ？——黄表紙『二十四孝安売請合』の場合……
518	第二節 逆転・解体・乱反射する二十四孝イメージ——西鶴『本朝二十不孝』の場合……
516	第一節 二十四孝関係の出版物のヴァリエーション——西鶴の登場まで……
515	はじめに……
515	第九章 江戸期における二十四孝イメージの氾濫／反乱——不孝、遊戯を契機として……
508	注……
507	小 結……
503	第五節 「竹に泣く」孟宗図の意味——絵画化される時間性の差異……
499	第四節 二十四孝図と他の漢画におけるモチーフの共有——山水に棲む孝子たち……
496	第三節 五山僧における孟宗観——清廉な精神性、望郷の念および楽園の表象……
494	第二節 五山文学における「蓑」「笠」の詩意……
490	第一節 孟宗図を作り変えたのは誰か？——文人姿から蓑笠姿の孟宗へ……
487	はじめに——日本における孟宗図変容の二側面……
487	第八章 蓑笠姿の孟宗——日本における二十四孝の絵画化と五山僧……

基礎資料編

第二節 不死への扉を開く子供……………	616
第三節 孝の表象の条件……………	618
第四節 孝子説話の複数の機能……………	621
第五節 孝／不孝の地平……………	627
第六節 漢字圏またはそれ以外——国家の枠組みと重ならない可能性……………	628
注……………	631

I 渋川版と嵯峨本の画像……………

1 大舜 637 / 2 漢文帝 638 / 3 丁蘭 639 / 4 孟宗 640 / 5 閔子騫 641 / 6 曾參 642 / 7 王祥 643 /
8 老萊子 644 / 9 姜詩 645 / 10 唐夫人 646 / 11 楊香 647 / 12 董永 648 / 13 黃香 649 / 14 王裒 650 /
15 郭巨 651 / 16 朱壽昌 652 / 17 刻子 653 / 18 蔡順 654 / 19 庾黔婁 655 / 20 吳猛 656 / 21 張孝張礼 657 /
22 田真田廣田慶 658 / 23 黃山谷 659 / 24 陸績 660

637

II 渡来テキストの画像……………

1 大舜 662 / 2 漢文帝 663 / 3 丁蘭 664 / 4 孟宗 665 / 5 閔子騫 666 / 6 曾參 667 / 7 王祥 668 /
8 老萊子 669 / 9 姜詩 670 / 10 唐夫人 671 / 11 楊香 672 / 12 董永 673 / 13 黃香 674 / 14 王裒 675 /
15 郭巨 676 / 16 朱壽昌 677 / 17 刻子 678 / 18 蔡順 679 / 19 庾黔婁 680 / 20 吳猛 681 / 21 張孝張礼 682 /
22 田真田廣田慶 682 / 23 黃山谷 683 / 元覺 683 / 24 陸績 684

661

III 漢ノ元墓の孝子図……………

1 大舜 688 / 3 丁蘭 690 / 4 孟宗 693 / 5 閔子騫 694 / 6 曾參 696 / 7 王祥 697 / 8 老萊子 699 /
9 姜詩 700 / 10 唐夫人 701 / 11 楊香 702 / 12 董永 703 / 14 王裒 705 / 15 郭巨 706 / 16 朱壽昌 708 /
17 刻子 708 / 18 蔡順 709 / 21 張孝張礼 710 / 22 田真田廣田慶 711 / 23 黃山谷 712 / 24 陸績 712 / 元覺 713

687

IV 大画面制作・お伽草子……………

① 策彦周良等着賛二十四孝図屏風 719 / ② 洛東遺芳館蔵二十四孝図屏風 720 /
③ 安藤家蔵二十四孝図屏風 721 / ④ 法然院蔵二十四孝図屏風 722 /
⑤ 南禅寺本坊大方丈襖絵二十四孝図 723 / ⑥ 根津美術館蔵二十四孝図屏風 724 /
⑦ 曾我直庵等筆二十四孝図屏風 726 / ⑧ ポストン美術館蔵二十四孝図屏風 727 /
⑨ 伝永徳筆二十四孝図屏風(昭和二年売立目録所収) 728 / ⑩ 海外流出本二十四孝図屏風 729 /
⑪ 元信印二十四孝図屏風(大正七年売立目録所収) 730 /
⑫ 伝雅楽之助筆二十四孝図屏風(大正八年売立目録所収) 731 /
⑬ 伝元信筆二十四孝図屏風(大正十四年売立目録所収) 732 /
⑭ 伝元信筆二十四孝図屏風(昭和十一年売立目録所収) 733 / ⑮ 狩野松栄筆京名所図等扇面 734 /
⑯ 「元秀」印扇面画帖 四十九図の内 734 / ⑰ 伝信春筆二十四孝絵巻 735 /
⑱ 伝離屋立圃筆二十四孝奈良絵本 736 / ⑲ 九曜文庫旧蔵二十四孝奈良絵本 736 /
⑳ 新刊全相二十四孝詩選 737 / ㉑ 等春筆花鳥人物図貼交屏風のうち「虞舜図」 738 /
㉒ 関西大学図書館蔵二十四孝手鑑 738

719

741

図版出典一覧

762

論文初出一覧

768

あとがき——孝の風景

769

索引

左
1

表一覧

表 1	漢く金元墓にみられる孝子図一覧	178
表 2	後漢く金元墓の孝子図・二十四孝図に描かれる場面変遷	181
表 3	孝子伝の構成	185
表 4	二十四孝三系統の構成	191
表 5	渡来テキスト所収説話一覧表	196
表 6	二十四孝三系統の構成	259
表 7	日本中古中世における郭巨説話本文一覧	291
表 8	『金玉要集』との本文比較	351
表 9	渋川版と嵯峨本の図像比較	465
表 10	室町期く江戸初期の二十四孝図と画中説話採択一覧	468
表 11	渋川版の図像にみられる渡来テキストの影響と改変	473
表 12	『本朝二十不孝』における二十四孝と先行・古典イメージの活用例	532